

藤江 正教授から教わったこと

田 野 有 一

藤江 正先生の名誉教授記念号の輯に、先生について述べる機会を得、光栄に存じます。私が本学に赴任（昭和 53 年 10 月）した時、先生は確か今の私ぐらいの年齢では…と記憶しております。先生は昭和 40 年以後、今春までの 28 年間、小樽商科大学の保健体育担当教官として教育・研究に情熱を注がれました。その約半分にあたる歳月を先生と共に歩むことができた私は幸せ者であり、先生に対し深く感謝を申し上げる次第であります。

先生は昭和 26 年春、日本体育大学の前身である「日本体育専門学校」の（記念すべき）最後の卒業生であり、その後、中央大学経済学部へ編入学され、昭和 28 年春に同校を御卒業…とお聞きしております。先生と同じ体育学の道を歩む者として、また日体大の同窓として、先生のような素晴らしい先輩に出会えたことを大変嬉しく思っております。私はこれまでに先生から数多くの教訓を賜りましたが、その中の幾つかをこの紙面をかりて記しておこうと思います。まず、先生は『人との出会いの大切さ』を教えてくださいました。この出会いが時として人生を左右することさえある…とも語られました。次に、運動中の『ケガに対する（細心の）注意の必要性』であります。これについては、特に先生御自身がラグビーの現役選手時代、不幸にして大事故（スクラム中の頸椎損傷）に遭遇され、大手術の後、生死の境をさ迷わねばならなかった…といった経験談を基に深く説いて下さいました。平素、体育・スポーツの指導にあたる我々にとっては、深く肝に銘じておくべき教訓であります。『時間の厳守』と『常に余裕をもって行動を…』も（先生による）不言実行の教えだったと思います。さらには、先生の『教え子に対する愛情』にはいつも感心させられました。かなり昔の…と容易に察しがつく本学の卒業

生が、先生を訪ねて来学する光景を、私は何度となく拝見してきました。“教師冥利”とは、このことを指して言うのでしょうか。

さて、先生が本学在職中、数多くの研究業績を残しておられますが、なかでも最も感銘深いのは、1973年3月刊行の人文研究第45輯に掲載の「現代生活と身体運動」と題した学術論文です。私が本学に赴任する以前の著ですが、「いつの時代にも健康ほど大切なものはない」…との書き出しで始まるこの論文は、(20年経った今日もなお、重要な課題とされている)“健康生活を営む上で身体運動が必要とされる根拠”を示し、また“身体運動の生活化の重要性”について指摘された貴重なものであります。私は研究室で時折読み返しております。時の流れとともに、社会は次第に変貌を遂げるものではありませんが、本論文で先生が指摘されている健康面に対する国の施策の立ち遅れ、国民の余暇時間の善用対策や運動不足に起因すると考えられる健康問題は、果たして今日的な社会問題でもあるわけです。しかし、こうした一方で、いかに時代の流れとはいえ、今日的な課題である(最高学府としての)大学における保健体育教育の見直し問題も、ともすれば易きに流れる風潮にある現代学生の気質をも十分に考慮した上での論議と見直しがなされなければ、将来において悔いを残すことになるのでは…と思い悩む今日この頃です。

ところで、藤江先生は本学の課外活動面においても精力的に御指導され、特に(先生の専門種目でもある)ラグビー部、ならびに基礎スキー部の発展に多大な功績を残されたことは誰もが認めるところであります。また、学外での諸団体の要職に在る先生の御活躍の御姿もまた、私たちには実に学ぶ点が多く、先生の穏和な表現の中に、そして真摯な態度をもって指導に当たられる場面において、藤江先生ならではの一面を拝見させていただきました。

先生には御退官後も、本学の保健体育教育の担当教官として御力添えをいただきますが、どうぞ御身体に十分留意されまして、私ども小樽商科大学の教官、ならびに学生に対して、さらなる御教導を賜りますよう御願い申し上げます。先生の益々の御活躍と御多幸を御祈念申し上げ、本輯(藤江 正先生名誉教授記念号)としての言葉とさせていただきます。